

黒谷で発見された

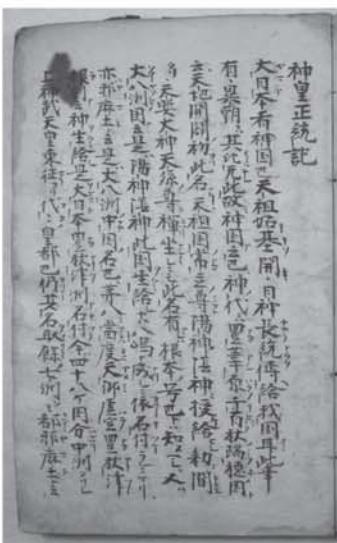
原田家に残つた
『神皇正統記』

『神皇正統記』

とつておきの話

253

東洋大學講師



▲只見本神皇正統記の奥書

黒谷の原田招夫家は、江戸時代には医者を営んでいました。医者は知識人としてさまざまな文化活動をしており、原田家に多くの蔵書が伝えられてきました。私は現在、原田家伝来の書物について書誌学的調査を行っています。

その過程で、原田家に伝存した『神皇正統記』は、天正十五年（一五八七）年に書写された貴重な書物であることが判明しました。『神皇正統記』は、南北朝時代の史論書で、北畠親房が延元四年（一三三九）年に當陸国小田城で書いた書物です。

(一五八七)年に書写された貴重な書物であることが判明しました。『神皇正統記』は、南北朝時代の史論書で、北畠親房が延元四(暦応二・一三三九)年に當陸国小田城で書いた書物です。

美しい装訂と文字

只見本『神皇正統記』の装訂（そなへじ）は、綴葉装（つづふうそう）といい、江戸時代（わとうじだい）の本でよく見かける袋綴（ふくろと）り本（ほん）とは違っています。綴

只見本『神皇正統記』の読み方

語学の研究において
提起をしています。

す。この表記法を宣命書といいます。只見本の片仮名は、中世の特徴をよく示しています。『神皇正統記』の原本は、宣命書で書かれたという説があり、原本の推定に只見本が役立つ可能性があります。

付されていて、漢字の音読みと訓読みを指示する符号（音合符・訓合符）も付されています。これが『神皇正統記』が成立した南北朝時代十四世紀の読み方なのか、只見本を書写した天正期十六世紀の読み方なのかは、今

さらに、全体が揃つていて破損
がほとんどありません。安土桃山時代の美しい書物の姿がここに
あります。これは、もう美術品といつてもいい書物です。厚め
の紙の表裏に、半丁（一頁）ご
とに九行で、名詞・動詞を端正
な楷書の漢字で大きく書き、時
間の片仮名が小書きされて、ま

写本に振り仮名が書かれていない場合が多く、漢字を訓読みするか、音読みするかを判断する問題があります。『神皇正統記』は、漢字と片仮名または平仮名で書かれており、ほとんどの漢字を訓読みで読むのが一般的です。一方、只見本『神皇正統記』には、多くの漢字に張り反名が

葉装は、数枚の紙を重ねて二つ折りにして一括りとし、数括りの折り目の部分を糸で綴じ合わせたものです。綴葉装は、中世の和歌や物語の書物に見られ厚めの紙に表裏の両面に書かれていました。只見本『神皇正統記』は表紙・題簽（題名の部分）や綴じ糸などが、装訂された当時のままの状態を保っています

A black and white photograph of a traditional Japanese book binding. The book is shown from a slightly elevated angle, revealing its dark, textured cover and the edges of its pages. The spine area features a decorative pattern, possibly 'Karakusa' (floral) or 'Karakusabishi' (floral with pine branches), which is a characteristic feature of certain historical book styles.



◆ 繻葉装とよばれる中世の綻じ方